慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	野村先生の哲学
Sub Title	Philosophical thought and »Ethos« of Prof. Nomura
Author	石坂, 巌
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.940(128)- 949(137)
JaLC DOI	10.14991/001.19601101-0128
Abstract	
Notes	野村兼太郎博士追悼
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

野村先生の哲学

石坂巖

「真の実在は不断の創造である」――大正十年、改版「経済的文化と哲学」七十頁。
「考えることは同時に作ることであつて……その作る要素を欠いてゐたならば、それは真の意味に於て学問とはいひ得ない」――昭和十七年、経済学部長就任講演、「理財学会論文集」三頁。
「人間の生活の特徴はそのうちに存する創造力にある。……人間は他の動物と異なつて反省に依つて生の営みを計画する。その意味で人間は創るものである」――昭和二十一年、「随筆文化建設」二十三―五頁。
（傍点筆者）

右の戦前から戦中を経て戦後におよぶ三つの時点において、それぞれ、学問的著述のうちに、教育者的発言の機会に、市民的生活のくつろぎにおいて表明された学問と生活についてのテーゼは、全く一貫して同一である。生活と学問を結びつけて貫くこの「知的創造性」（これは後にのべるように生活の個性的な合理化の努力を意味する）の信念こそ、大正七年、大学卒業以来の先生の学問的思考と学者的生活の営みの底を一貫して流れた主調低音であった。先生が思想と生活の流れにおいてこの態度を少しも変えなかったことは、一方にリゴリズムの趣きを生活態度に滲ませると共に、他面、一種のオプティミズムの色合いを先生の思想に漂わしめたことは否めない。

一、大正の時代

先生の学者的エートスが今のべたように時代の屈折にも変わることがなく、又先生の思想的核心が、後に詳しく記すように、文化価値理念を中心に普遍的主張として形成されたにせよ、その思想、精神的態度は、先生自身すでに大学卒業の二年後にミル自由論の取扱いにさいし、「社会を離れて個人がない如く、時代を離れて学説なく、其の生涯と其の論断と密接不離なものである」と述べられているように、先生の思想形成期である大正の歴史と社会を離れては考えられない。もともと先生の哲学的活動は大学卒業後の数年間に集中され、学問論と社会哲学の二つの対象局面を中心として展開された。前者は「経済的文化と哲学」と題する先生の処女出版物において取扱われ、後者は三田学会雑誌のほか当時の代表的綜合雑誌である「太陽」を始めとして、「中央公論」、「解放」などおよび新聞紙上を舞台としてくりひろげられ、後に「社会生活と理想哲学」と題して一書にまとめられた。哲学的研究が大正年代における青年時代に集中されたとはいえ、先生の「本質的意思」は冒頭に記したように、その後の西洋経済史研究、日本経済史および日本経済思想史研究の底を主調低音となって流れていることは言うまでもない。たとえば昭和十四年に発表された「理論と実践――最近イギリスにおける経済学方法論争」の論文や、戦後しばらくしての「思想史研究の課題」という論文は、専門的歴史研究にうちこみながら尚かつ単なる実証研究に傾斜しきることなく、学問構成の本質的基盤そのものを問いつづけた青年期以来の問題意識の現われである。亡くなられる数年前、秋のゼミナールのある日の講義に、歴史学研究の目標は「人生そのものを明らかにするにあり、しかもその人生とは単なる表面的現象そのものではない」とのべられた言葉は今尚筆者の耳に新しいが、先生の学問的志向を示して十分であろう。

さて先生は大正二年に大学に入られ、同七年に卒業され同時に先にのべた如く哲学的研究、歴史研究やジャーナリズム世界に活躍され、大正十一年四月渡欧、同十四年春満三年のイギリス留学を終え帰朝、爾来経済史研究にひたすら向われたのである。われわれにはすでに明治は遠くなり、先生を育くんだ大正期もおぼろに遠霞の背後に退いているが、この大正期は、日本「近代」史上決定的に重大な歴史的定点であった。日本資本主義社会の近代的歩みに特徴的アクセントが刻印されたのはまさしくこの時期であった。日露戦争の勝利のあと日韓併合（明治四十三年）を成就してから対支二十一ヵ条要求（大正四年）にいたる間に、外的には植民地拡大をなしとげた日本資本主義は、内的には、明治四十三年の大逆事件を機に社会主義運動、階級対立的労働運動を徹底的に抑圧し、社会運動、労働運動のいわゆる「冬の時代」の出現により大正の始まりを迎えることを通じ、資本主義的内部構造の足固めをした。かくて第一次大戦のマーチに奏でられながら資本主義的行進を開始した。

	大正元年	五年	十年	十五年
会社数	二、六七五	八、二九	三三、四〇三	四六、八〇五
工場数	一五、一九	一九、二九九	四九、七五四	五一、九〇六
工場労務者数	八六三、四四七	一、〇九五、三〇一	一、八三〇、七七六	一、八七五、一九五
鉄道開業路線	五、九八七・七四粁	七、六三一・〇九粁	八、八七二・五〇粁	三〇、六六四・二三km
汽船噸数	一、四三〇、三三九	一、六九六、六三一	三、一六七、九七六	三、六〇七、〇三八
国民所得	二、二四七百万円	二、三六四	一〇、六八八	二三、五〇四

（耕西・大島・加藤・大内「日本における資本主義の発達年表」）。
この資料に明らかなように今日欧米の学者から驚異的とみられて

いる、明治以来の日本資本主義発展の確立はこの時期にあった。けれども政治的権力により如何ほど抑圧されようと、資本主義的生産様式は第一に、自ずと自己に対応する意識形態を生み出さずにはいない。すなわち、ブルジョア的成熟による市民意識の形成である。第二に、資本主義生産様式は胎内に自己対立物をはらまざるを得ない。言うまでもなく労働者階級の出現と社会主義の発生である。いわゆる大正デモクラシイの指導者吉野作造がその指導理念「民本主義」を中央公論誌上に発表したのは、大正五年先生の大学在学中のことであり、翌六年にはソヴェト革命の衝撃が日本にも波及し、ついで先生の卒業された七年には米騒動が国内を揺り動かした。またその年には保守思想の打破と世界の進展に即した思想の啓蒙を目的に、吉野作造と福田徳三らにより黎明会が結成された。他方、労資協調主義を看板に大正元年に創立された友愛会は、その看板の故にほそぼそと存続していたが、八年には大日本労働総同盟友愛会としてようやく組織を固めるにいたった。その二年前すでに河上肇の「貧乏物語」が世に出、八年には彼により社会主義宣伝のため「社会問題研究」が発刊された。さらにこの八年には「我等」、「改造」、「解放」、「新社会」などの左翼的色彩の雑誌が続々と創刊された。先生の卒業された七年から八年にかけては大正デモクラシイの絶頂期であった。しかし、九年になると一方に日本最初のメーデーが催された反面、森戸事件の暗い陰がデモクラシイ運動にしのびよっていた。先生が渡欧された十一年には日本共産党が結成されたのもつかのま、十三年には早くも解党を余儀なくされ、帰朝された十四年の春には治安維持法が成立していた。つまり先生は大正デモクラシイの分水嶺の頂点に卒業され、デモクラシイの波が砕け散ろうとする寸前に日本を離れ、氷結し始めた時に帰国されたのである。では先生はこのような社会をどのように眺め、その時代に生の理念をどのように措定したろうか。

二、社会哲学

先生の思想、哲学は一方に理念としての文化価値的理想主義、他方に人間は自己保存と自己主張の原則に服すという人間像とそれにより組みたてられた社会観、この二つのモメントを縦横の軸として構成されている。この理念と人間像、社会観は、自由の問題を始めとし労働、労働組合、社会改革、社会主義などの社会問題から歴史論、学問論におよぶさまざまな問題考察に隅の首石として据えられてある。

先生によれば人間の自己愛は、一方に自己の持続を目的とし他からの障害排除をしながら消極的に自己保存につとめると共に、他方積極的に他人に自己の主張を承認させる要求をもつ。自己保存の第一は経済的独立であるが、この保存本能の下に家族形成、社会組織化を行なう。われわれの生存的本能欲求が最小の要求として最低生活の持続にとどまる時、それは自己保存の段階であるが、自己保存のための欲求がそれを越えて出現する場合、それは自己主張要求となる。しかし人間はこの自然的、本能的要求に基く欲望価値に従うばかりではない。本能的生活の自己保存の満足化に対し、他面人間は選択的判断を通じ意識的行動を遂行することにより叡知性を示す。人間が内的にも外的にも自然科学的因果律から独立した選択判断を示す時、そこには当然、理性的、自由的意思の存在が考えられねばならない。したがって選択的判断は無標準的判断の放恣ではなく、理性的意思による合目的判断でなくてはならない。本能的生活の「自己保存」の満足化に対しこの理性的、自由意思的生活にあっては「自己主張」の充実化が必要とされるのである。この自己の自由意思のもとでの自己主張の充実化ということは、自己の天賦の才能を不断に自発的に発揮せねばならないという義務的論理、つまり創造への倫理的意思につながるのはいうまでもない。この意味で才能のない者でも自己に最適の価値完成を行なうことこそ最も重要であり、そこに絶大な価値が存するのである。先生のこの考え方は、あの白樺派の武者小路が、自分たちの文学上の立場を人類の全体的生長への意思のうちに設定し、人類の生長のためには個人の生長が必要であり、そのためには「各自が自分のなすべきことをすることで、自分に出来る範囲で最上の仕事をすることだ」（白樺の運動）と述べたのと全く軌を一にしている。ただ白樺派が人類的意思の下に心情的に個性の確立主張を表現したのに、先生は文化価値理念のもとに論理的に表現した違いがあるにすぎない。ともかく個人的価値の完成が理想なのであり、この個々人の個々の価値完成を帰一、統一するものが先天的文化価値の観念なのである。すなわちわれわれは単なる自己保存の本能的欲求満足の世界ばかりでなく、自由意思のもとに天賦の才能を出来る限り発揮して、自己を主張しようとする価値の世界にこそ生きるのである。ここではある理想（イデー）を終局目的と考えその理想に到達しようと努める。この理想とするものこそ文化価値の完成なのである。そしてこの文化価値はわれわれの不断の自己天賦の才能の発揮によってのみ到達される。すなわち個人的価値完成はそれよりも大なる価値、つまり絶体価値たる文化価値に依存して初めて渾然たる個人の価値完成が期待される。個人の内的意識においてはそれは人格的価値の完成として現われるのである。それ故、人間行為の基準としての善は、ある行為が人格完成に資するか否かに依存することになる。そして右に述べたように、この人格完成は各人の天賦才能の不断の発揮により実現されるのである。ここに結局、先生の文化価値の哲学の目ざすところは、われわれの絶えざる創造的活動の自発的努力のうちに、人格完成をはかること、すなわち個性的自我の確立にほかならない。

この立場からすれば理想社会像が、もろもろの異質的個人を補足してその本質を十分に発揮させることの出来るような有機的組織をもつ社会として、描かれることは自明の理であろう。家族、国家、社会はすべて個人的価値完成の手段としてのみ価値をもち得るので、一つの社会組織にして、そのような役割を果し得ない時には当然改造されねばならない。ここから極めて倫理的であることによっ

て、極めてラディカルな社会改造論が形成される。すでに人間の人間たる所以は、文化価値哲学の立場からは、文化価値理念に向っての自発的、創造的努力の遂行にあることはのべた。この努力を、すなわち直接的には自己主張であり、間接的には文化価値の完成のための努力を先生は労働という。そしてこの労働により一つの価値を幾分でも完成することに満足を感ずる——自己主張の満足——を労働の享楽化とよぶ。この点において学者、芸術家、資本家が努力の苦痛にまさる労働の享楽を得ているのに、労働者のみが——経済学的労働概念の一要素として苦痛があるように——苦痛を補うに足らず、自己保存的活動にあくせくしているのは果して肯定し得るか。労働者も自己主張権をもつものであり、文化価値追求のチャンスは平等に与えられるべきである。今日、資本主義の欠陥は、資本蓄積により生ずる大企業利益の資本家的独占によって、資本家は労働の享楽的報酬を得ているのに対し、労働者は苦痛の段階に留まり自己主張を否定されている。すなわち、人格をはく奪されている。それにより又同時に生命保持の為、労働者は機械的な非独創的な仕事に従事することにより機械の代用と化している。われわれは労働者に自己主張的余裕を与え、単なる機械代理の労働を止め労働を享楽化せねばならぬ。したがって先生にとり八時間労働制などは論ずるまでもない当然なことであった。かくて現代社会にあっては次第に覚醒してきた第四階級の生存権の確立を企てねばならないのである。その為に労働組合の組織は当然のことであり、労働組合の使命は最終的には、労働の利益を専有する不当な階級を滅亡した後、労働者の人格をみとめ、すべての労働に自由を与え之を享楽化し、財分配の公正をはかるにある。それ故、組合は避くべからざる衝突はあくまで断乎闘うべきで、あいまいな妥協は許さるべきでない。この争闘的職分を果す為には団結力の弱い——先生の言葉をそのまま用いれば——職業別組合を棄て産業別労組を組織すべきであるといって、まさに現代日本の企業別労組組織の問題点を遙かな大正の時点において指摘している。その意味から、賃銀制度を廃止し、産業の自治化により労働者の自由を実現しようしたギルド社会主義に先生は最も心を寄せたのである。かくて人格が無視され、当然うくべき利益が与えられず有産階級が利益を専有し文化発展を阻害する限り、労働者階級は解放を求むべき権利をもち、有産階級の反省ない場合には新社会建設の直接行動は是認さるべきであること、直接行動そのものは手段なので、この手段には倫理的判断は妥当しない、問題はその目的であり、直接行動が各人の人格的価値完成に——文化価値実現に——寄与する生活に導く唯一の手段である場合にのみ、その直接行動は倫理的に肯定し得ると先生が言う時、すぐれて倫理的であることによりすぐれてラディカルな社会改造論の帰結のうちに、大正デモクラシイの航跡をみることが出来る。そしてまた同時に、文化価値建設の為には闘争を避くべきでないという、先生の創造的活動尊重の情熱的個性をわれわれは感じないではいられない。

三、科学論

先生にとり最高の存在は文化価値理念に向っての不断の創造的活動である。個人的価値が絶体的な文化価値に依存しているように、科学もまた先生においてはこの文化価値に依存して初めて可能的存在となる。科学成立の基礎は創造的先験者にありと、西田幾多郎（思索と体験）が言っているように、先生も科学的アプリオリは真実在の派生であること、言いかえれば、不断の創造こそ真実在でありこの真実在の概念化された一面が科学にほかならないとのべている。それ故、先生はまた法則を一般的法則と根本法則に区別し、科学的法則は前者の一般的法則として時空に限定されたものであり、後者の根本法則に基いて成立するものとされる。この根本法則が不断の自発的創造の発展であることは言うまでもない。元来われわれの経験的知覚はアプリオリな範疇により概念化され、この概念がさらに関係構成力としての範疇アプリオリにより法則化される。科学は単なる概念や法則の雑多な寄せ集めではあり得ない。そこで種々雑多な概念、法則を整理、統一する標準が不可欠である。この標準たるべきものがアプリオリの選択目的なのである。アプリオリの選択目的により統一された概念的知識の集団が科学なのであり、このアプリオリは範疇に表象されず、したがって、概念ではあり得ないのである。科学的アプリオリは、純粋絶対世界であり価値そのものの絶体的価値世界である真の実在の派生として、超越的アプリオリが実在の一面である客観的表象世界へ投影されたものなのである。その投影により初めて認識さるべき客観的世界が出現し、そこに科学的世界（または科学的世界観）が成立する。科学的世界または科学的世界観はそれ故にこそ一面的なのである。根本的存在としての純粋世界、絶体的価値世界が先生にあって不断の創造であることは、何度も繰り返しすでに述べた通りである。ところでこのようにして成立する科学はその意味では選択目的の種類、数の存在に応じて、その数だけの科学が成立することになり、この点リッケルトの普遍的、個別化的という方法の区別による科学の分類は、先生の承認するところとならない。それは単なる方法の分類にすぎないからである。すでに述べた社会改造の目的こそ第一義的であって、二次的な手段に倫理性が妥当しないのと全く同様に、科学の場合にも目的が第一義で方法＝手段には科学を分類する本質的属性は附着しないのである。ここにリッケルトの影響を極めて強くうけながらもリッケルトの論理とは区別さるべき先生の個性的面目がある。と同時に先生のこの論理は逆に考えれば科学はすべて一つであるということに帰着し、すぐ後にふれるように、歴史は科学でないという先生の特殊な歴史論を生み出すことにもなっている。ここで歴史論に入る前に少しく先生の経済哲学にふれておこう。

経済学が科学として可能であるか否かという先生の問題点は、大正期に入ってようやく成熟してきた資本主義社会の自意識の現われとして、左右田博士の強力な理論的展開の下に押し進められた時代

的問題意識であった。その科学論からして、先生にとり経済学の科学性はそのアプリオリな選択目的にある。このアプリオリな選択目的の科学への具体的適応化は嚮導概念として現われる。法律学を成立せしめる嚮導概念が権利、義務であるように、経済学にもまた何らかの経済的アプリオリとしての嚮導概念がなくてはならない。この嚮導概念の必要性については先生は左右田博士と説を同じくするが、左右田理論が経済概念の歴史性からして貨幣という歴史性概念を嚮導概念とするのに対し、先生は貨幣なき経済現象の存在し得ることからそれに反対し、財を嚮導概念とした。財とは経済価値を有するものである。あるものが経済学の先天的要素に一致すると認識された時、そのものは経済価値を有す。また経済学の先天的要素と一致する経済的価値をもっていても認識されず何らの価値判断も認められない時には、そのものには経済価値はない。あるものの経済的価値の認識の必要を感じ認識される場合、そのものは経済価値ありとされる。その認識の必要は稀少性により促される。このように効用価値説から物の効用に対する人間の認識というモメントをとり入れる一方、よしんば価値の源泉ではないにせよ、価値の創造者は労働であるとして労働価値説のモメントをとり入れることにより先生の経済価値論はくみ立てられている。労働は一定の価値を前提とせねばならず、またその価値は労働によってのみ創造されるというのが先生の考えなのである。そしてこの労働が先生の根本テーゼである創造的活動に結びつくことも言うまでもない。人間の経済活動はすべて人間の生存維持、自己保存を目的とし前提とする。経済価値の増進はこの生存生活の物質的改善であり、この事実を経済価値論はその根柢におかなくてはならない。しかし人間の生存は単に物質的生存維持に留まらず、より高き文化価値に到達せんと欲するものである。そこに向う努力はすべて経済上の労働なのである。労働とはだから経済的価値を創造して行く過程における肉体的・精神的な「創造的の力」(Creative Power)なのである。

先生は以上のべたような社会哲学、経済哲学を残して大正十一年春イギリス留学に旅立たれた。

四、歴　史

留学の名目は経済史研究であった。先生の卒業論文は科学論であったが歴史的関心も早くからあったようだ。先にあげた処女出版である「経済的文化と哲学」中には、個人の覚醒と共同生活の拡大という文化発展の歴史的事例として、古代における家族制の研究や中世ギルドの研究がすでに収められてあった。そして留学中に経済史の専門的研究の決意が固められたのである。留学中の先生の精神的推移は「欧洲印象記」(日本評論社)としてまとめられた書簡集に実にヴィヴィッドにえがかれている。この書簡集は欧洲印象記というより心象日記と言うべきで、自分は何をなすべきか、研究生活をどうすべきかという問いの、自己への投げかけを中心とした心の起伏と、その起伏に映じた異国の人間、風物の記述に終始している。渡

欧して半年目の手紙には「理想は理想として現在の社会に対しては一個人として最善を尽すより仕方のないこと、自分の今の問題は自分だけのこと、自分の生活基調の発見のみだ」と言っている。翌年一月には今自分の心は常に自己一個に局限され、己れの内なる個の成長にのみあり、対社会の問題とは離れているという手紙を書き、さらにその年の終りには「私としても概念を明確にせずしては科学の研究を明白にすることは出来ないと考へていた。然し方法論にのみ終始し、それ以上に出ない学問研究も学問として正しいものであるとは考へない。少なくとも今の自分にとってはある学問的体系を作るよりも、先づその基礎となり、材料となるべき事実の研究蒐集、殊に先づ歴史的研究に努力しようと思ってゐる」こと、そして社会問題、政治問題に関心の薄くなっていることを右に引用した書簡の後に続けて記している。かくて帰国の前年の夏には、ケムブリッジにおける研究は十分にまとめ得なかったが、「然し大体ながらその骨子も立ち、研究方法も略々見当がついた。これをまとめるのは日本でゆつくりやりたいと思ふ。唯根気が肝腎だ」と研究方向の確立を記すにいたっている。研究方向さえ確立すればあとはすでに形成されていた創造主義の哲学、すなわち天賦才能の不断の自発的発揮の努力の哲学に従うだけである。歴史研究への専心である。この政治的、社会的問題から歴史研究への問題関心の推移を胸中に収めて、大正十四年春、祖国の土を再び踏んだのであるが、満三年ぶりに踏み立ったこの祖国の土壌では、かの悪名高き治安維持法の成立により大正デモクラシイの花は実を結ばないまま踏みにじられようとしていたのであった。先生のその後の専門的歴史研究への専心はまさしく時代と環境と個性の産物であったといえる。では先生は生涯かけた歴史研究をどのようにみていたろうか。

先生の歴史論の最大の特徴は歴史は科学でないという立場である。この立場は最後まで先生により固執されたが、それは先生の哲学と無縁に形成されたものではなく、この意味で又その哲学を生んだ大正思潮のある特質を現わすものでもある。先生は歴史の要素として時間的経過、事実的存在、個別的記録に加えて、文化価値への関係という、従来の日本の歴史論にない新しい要素を導入した。これはもちろん哲学的思弁による一定原則により歴史的素材を取捨し、先験的歴史構成することではなく、歴史を構成するに役立つべき指導的概念としての文化価値関係操作の意味である。同時にこの考えは人類行動のうちには、何らかの目的に基く選択的意思の現われがあること、かかる目的行為が何らかの標準による取捨選択判断である以上、必然的に意思自由の存在を意味し、単なる自然必然的な因果論では割り切ることの出来ないという先の文化価値的社会哲学の考え方と重なり結びついているものである。かくて一方に、価値関係的要素(即ち目的論的要素)の重視により、歴史は単なる事実的記録ではないと主張され、他方、人類行動中に自由意思の働くことを認めることにより、歴史における因果論的(或は自然科学的)概念構成を一面的で実在から遊離した観念的世界として批判され

る。人類の歴史は目的関係と因果関係が複雑にからみ合い融合している。個々の構成現象の細密な分析と共にそれより一層重大な全体的把握を確実にしなければならない。歴史は全面的観察を企つべきものであり、実在に即すべきものである。かくてまたわれわれは歴史現象そのものの必然性、その発展の必然性を会得することにより歴史の本質を知るのである。分析的説明は単に素材の意味を明確にするのみである。歴史家の主観性も努力によりある程度まで客観化されることが出来、歴史と同化することにより、人生発展原則と歴史家の世界観とが一致することが出来る時、記述は客観的となるとのべられている。それ故、歴史を科学ならしめることは却って歴史の本質を失うことになるとして歴史は科学でないという歴史論を主張されるのである。この場合、科学とはアプリオリな範疇や選択目的構成により時間的要素の遮断の上に成立するものであり、たとえ時間的法則の定立化は可能であっても、それは普遍時間化で一つの形式化にすぎず現実を遊離したものであるからとして退けられるのである。先に指摘したように、文化科学、自然科学のリッケルト的方法区別による学問分類をみとめないで、本質的には科学の性格は一つとみる結果になる先生の科学論もまた歴史は科学でないというテーゼを生んでいるのである。この科学論と西田哲学のいう純粋直観の立場とで先生の歴史論は構成されているが、ここに繰返し言えばこの歴史論を貫き導いているのは文化価値哲学なのである。先生の言う文化とは「真の世界を求めんとする意思による人間の努力が

作りあげた事象の全体であり、したがつて単なる文明進歩ではなく永遠の価値を有する不断の創造なのである。」そして生存の価値は、かかる文化の実現過程でその全人格を十分に発揮したか否かにあるというのが先生の確信であった。つまり文化価値理念とは、自由にして自発的な創造的活動による天賦才能の形成、すなわち個性的自我確立の信念であった。それはまことに人類の主体的成長への意思への信念により文学的自我の確立を信じた白樺派や人格主義の阿部次郎を生んだ、大正期の精神的特質の現われであった。普遍的真理への確固たる信念、ある場合には武者小路にみられるような手放しの普遍的真理への信頼と、そういう信念に裏打ちされた強烈な個性的自我の確立。それは確かに社会の前近代的な共同体束縛に対する市民的解放の機能を果さしめたが、その反面、確立された強烈な自我は、自我をとりまく外の社会やその歴史的流れへの窓を閉ざす結果をもたらした。いわゆるオールド・リベラリズムの人たちの現代における社会的限界はそういうところに根ざすと思われる。先生を包んだ大正の思想や文化一般が個性的自我の確立に出発したのに対し、現代のわれわれは自我の解体にすべてを出発している。認識と現実の間に、深い裂け目が橋を渡すことの出来ないままに、口をあけてしまったのである。それ故、人類の意思だとか普遍的文化価値とか、意識一般とかを信じない。したがってまた歴史現象の認識にさいしても認識者は意識一般や純粋思考ではなく、具体的な一個の人間を媒介とする限りにおいて、認識されたものは必然的に形式化されたもので、その意味で現実離れせざるを得ないと考える。すなわち認識にさいし認識する人間――自己の存在の基底を常に考えなくてはいられない。ここに先生以後の歴史哲学が、昭和の社会的不安と共に、先生の友人であった三木清の歴史哲学（昭和七年）を経て次第に論理主義的、乃至は認識論的性格を喪い、大戦中の存在論的歴史論から戦後の実存主義的歴史論へと移った所以がある。経済哲学も同様に左右田哲学の後継者杉村広蔵のあと、本多謙三を転回点として存在論的・実存主義的方向へと向った。

ともあれ先生はいわば創造主義の哲学を形成し、それを自らに課して実践し歴史研究に不断に従事した。先生が戦時下、政府が政策遂行機関として隣組をつくり、これを江戸時代の五人組組織になぞらえその隣保互助性を称揚したのに対し、五人組組織はむしろ上からの強制機関であると反論したり、戦争中西欧の科学の消化吸収の必要をはばからず言い、戦後いまさらの如き「科学的」歴史の流行に乗じなかったのも、いずれも先生の創造主義の哲学と自己の哲学の命ずるところにあくまで従い、実践して止むことのなかった生活態度に由るものである。確かに先生にはドストエフスキー的面貌はみられなかったが、真理追求の学問的厳しさが、その人柄をにじみひたしていたことは先生を知るすべての人の目に明白であった。生存の価値は、文化の実現過程で不断の創造的活動によりその全人格を十分に発揮するか否かにあるというのが、先生の信念であったとすれば、先生の学者的生涯はまことに、その信念そのままの生涯であった。

（学恩を偲びつつ、九月一日記）

〔附記〕

与えられた紙面の制約上、引用の指示を略したが、先生の哲学を知るための文献は左記の通りである。

○「経済的文化と哲学」大正九年初版、同十年改版。
○「社会生活と理想哲学」大正十年刊。
○「欧洲印象記」昭和二年刊。
○「歴史と科学」昭和十一年刊。
○「むかしと今と」昭和十五年刊。
○「探史余瀝」昭和十八年刊。
○「随筆文化建設」昭和二十一年刊。